

年間第1週 金曜日 1月16日

赦し合いの実りは安息

第一朗読（ブライ4章1—5・11節）

1 だから、神の安息にあずかる約束がまだ続いているのに、取り残されてしまったと思われる者があなたがたのうちから出ないように気をつけましょう。2 というのは、わたしたちにも彼ら同様に福音が告げ知らされているからです。けれども、彼らには聞いた言葉は役に立ちませんでした。その言葉が、それを聞いた人々と、信仰によって結び付かなかったためです。3 信じたわたしたちは、この安息にあずかることができるのです。

「わたしは怒って誓ったように、

『彼らを決してわたしの安息に

あずからせはしない』

と言われたとおりです。もともと、神の業は天地創造の時以来、既に出来上がっていたのです。4 なぜなら、ある個所で七日目のことについて、「神は七日目にすべての業を終えて休まれた」と言われているからです。5 そして、この個所でも改めて、「彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない」と言われています。

11 だから、わたしたちはこの安息にあずかるように努力しようではありませんか。さもないと、同じ不従順の例に倣って墮落する者が出るかもしれません。

福音（マルコ2章1—12節）

1 数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、2 大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、3 四人の男が中風の人を運んで来た。4 しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。5 イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。6 ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれ考えた。7 「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」8 イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。9 中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。10 人の子が地上で罪を赦す権威を持つていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。11 「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」12 その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。

朗読から祈りへ

―安息を求めて―

イスラエルの民はモーセに率いられて安息の地、カナンを目指して旅を続けた。その旅は荒れ野の旅であり、試練と苦難の旅であった。この旅で民の神への信仰が試される。神がかならず安息の地に導いてくれることを信じた者は約束の地を得る。信じることでできない者は神から約束された安息を得ることができない。

信仰は体験に基づくといってもよい。イスラエルの民が代々語り伝えたものは、神が民になさった出来事である。神はわたしたちと共におり、わたしたちを救ってくださった。何度も何度も。イスラエルの民は自分たちになさった神の業を語り伝える。神が民になさった「事実」がかれらの信仰の土台となる。われわれを苦難から救ってくださった神がわれわれを見捨てることはない。

これがイスラエルの民の信仰の基、希望の土台であった。信仰は理念に基づくものではなく、神の約束の小さな事実の積み重ねに基づくものである。

今の時代のわたしたちも荒れ野を旅してい

るようなもの。さまざまな困難の中にあるわたしたちをヘブライ人への手紙の著者は励ます。「神の安息にあずかるように努力しようではありませんか」と。

答唱詩編で「神のわざを思い起こそう、力ある不思議なわざ」と歌う。「神のわざ」、それは単に昔の出来事ではない。遠い過去に、遠い地で行われたことだけでもない。それは、なにより、自分の人生の歩みの中で神が行われた「わざ」である。わたしたちの信仰は単に「教理、教義」に基づくものではない。自分の人生の歩みを振り返ってみるとき、そこで具体的に見えるかたちで実現した神の「わざ」に基づくものである。それに気づき、それを見極めることができる人が真の信仰と希望をもつことができる。

―今の安息から永遠の安息へ―

「神の安息」はイスラエルの民に約束された土地だけで得られるものではない。今、この地にあつて得られるものでもある。それはイエスによって実現された。イエスの「わざ」は神からの安息を人々にもたらすものであった。それは罪の赦しによってもたらされる。

カファルナウムはイエスの宣教の中心地。大勢の人がイエスのもとに集まる。人々は何

を求めてイエスのもとに集まるのか。すきまもないほどに。四人の男が中風の人をイエスのもとに運んで来る。人々に阻まれてもイエスの前に中風の人を差し出す。イエスはその四人の男たちの「信仰を見て」中風の人に言う。「子よ、あなたの罪は赦される」と。四人の男たちの信仰は「事実」に基づく。かれらはイエスのみ言葉を聞いた。イエスの「わざ」を見た。だから、イエスに希望を抱いた。

「子よ、あなたの罪は赦される」。

イエスは「地上で」罪を赦す。今、ここで。この言葉に希望をおく者は「安息」を得ることができる。今、ここで。

わたしたちは赦されなければ生きられない存在。赦されなければ次の一步を踏み出すことはできない。赦されることによって安息が得られる。イエスは地上で罪を赦す権威をもっている。中風の人が起き上がり、床を担いで家に帰った。この出来事を見て人は驚き、神を賛美する。

罪を赦す権威は教会に委ねられた。ゆるしの秘跡をとおして赦しが確実に実現していく。この権威は赦すために与えられたもの。「互いに赦し合いなさい」とイエスは言われた。赦し合いの実りは安息。その安息は今、積み重ねられて、永遠の安息に至る。